



埼玉医科大学医学部 同窓会会報

臨時会報—東日本大震災への救護活動—

平成23年5月



巻 頭 言

会 長 渡 辺 雄 幸



会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。今回の東日本大震災で被災された会員の皆様には、心よりお見舞いを申し上げます。また親戚やご友人が被災された会員も、さぞ御心配のこととお察し申し上げます。

大震災の当日、私は横浜にある自宅と併設した診療所で、通常通り診療していました。突然の大きな揺れに続いて停電し、数人いた患者さんを診察後、休診にして従業員を帰宅させました。ラジオと懐中電灯を用意し、夕食はロウソクを立てて、一人でお菓子を食べました。幸いなことにメールが通じ、妻と子供たちの安否が確認できていましたし、ガス・水道は大丈夫で、建物や室内の器物の損壊もありませんでしたので、比較的落ち着いていました。その日夜、都内にいた家内を車で迎えに行こうと道路に出ましたが、勿論信号も消えており、人もいない真っ暗な家並みでした。ところが国道に出ると、車が渋滞しており全く動かず、歩道には疲れきった顔をして、黙々と歩く人の群れがありました。おかげ様で、停電は約6時間で復旧されましたが、それまでの間、一人自宅で、ロウソク一本で、ラジオから流れてくる地震の情報と、都心の混乱状況を聞きながら、私は何か全くの別世界を感じていました。

大地震とそれに伴う大津波による甚大な被害、そして福島原子力発電所の放射能汚染と、テレビで毎日のように流される被災地の状況を見ながら、同窓生の安否と被害の程度

がどうなのか、心配しておりましたが、連絡が取れず、まったくわかりませんでした。電話やインターネットで情報を集めようとしたのですが、なかなか思うようにいきません。避難所にも郵便が届くようになったと聞き、特に被害が大きかった青森、岩手、宮城、福島、茨城の5県に在住の同窓生に、文書で連絡をしました。また情報収集を呼びかけていたところ、少しずつ同窓会に情報が集まるようになり、またご本人からの返信もあり、その甚大な被害状況がわかってきました。いただいた手紙を読むうち、胸がつまる思いでした。急性期の迅速な支援はできませんでしたが、中・長期的な支援の一つとして、もう会員の皆様のところには届いていると思いますが、義援金を募ることにしました。

この臨時の会報を発行するにあたり、編集委員会の柳澤先生から連絡をいただいた時、皆、思いは一つ、と感激いたしました。被災された同窓生に思いをはせ、現状を知り、同時に、被災された方を支援するために頑張っている同窓生の姿を少しでも伝えられればと願っています。そして今、すべての同窓生がこの大災害について、被災された同窓生にどんな支援ができるのか、そして被災された方が、少しでも早く元気で頑張っていけるように皆で考えたいと思っています。

最後になりましたが、被災された会員の皆さん、あなたは決して一人ではありません。心配している多くの人がいることを忘れずに、頑張ってください。